

ほたるの群れ

6

退（すさる）

「白？」  
米原アズミは大きなコンビニ袋を胸元に抱え込んで、暗い地下の部屋の中を覗き込んだ。湿った空気にカビの臭いが混ざる。布で覆われた薄暗い電球と、蝋燭の光だけで照らされた地下室は最初に来た時は怖かった。でも、今はその暗闇よりも、あっちこっちに咲く鉢植えの花に目が行くようになっていた。

「白？」

繰り返すと、部屋の中央のソファで低い声が聞こえて、ソファの肘置きに積んであった重たい本の山がドサドサと床に落ちる。一瞬遅れて、背もたれの向こうから白い髪の少年が起き上がった。眠っていたのか、髪の毛はすっかりほつれて、目はぼんやりとしていた。

「あずみん？」少年がこつちを見て、薄笑い笑みを浮かべていった。「ごめんね、寝てた」

「ううん」

コンビニの袋を持ってソファに駆け寄ろうとしたが、急に白が手を上げて鋭い声をつぶやいた。

「待って」

その声で足を止めると、白は「ごめん」と言いながら、ソファの端にかけた手袋を取った。それを片方ずつ手にはめながらつぶやく。

「うっかりするといけないから」

そう言つて、白が赤い手の爪を手袋の下に隠した。

一番きれいなマニキュアでもきつとあんなにきれいにならない。——もつたいないなあ、と思いつながら爪が手袋に隠れるのを待って、ソファの横に腰掛けた。ソファの周りはいつも通り、テーブルも、クッションも、床も、みんな難しい本に埋もれていた。英語の本が多かったが、それ以外の知らない言葉もいくつか目に付く。

分厚い本の山に似つかわしくないコンビニのレジ袋を、どきつと白との間に置くと、白はひざに載ったままの読みかけの本を横へ避けた。

「じゃーん」

そう言つて、取り出したのは白が好きなのスナック菓子だった。ただ、いつもの味ではなくて、昨日からコンビニの棚に並んでいる新商品「燻製ベーコン焼きそば味」だった。毎日見に行っていたから、新作なのは自信があった。

「あれ？ 新味？」

白はそう言つて、その袋を受け取った。

「秋の新味。昨日から始めたんだよ」

「そっか。もう外は秋なんだね」

どこか寂しい笑みが浮かぶのを隠しながら、白が鉢植えに目をやる。いくつかしおれかけたものがあるのに気が付いて、白の笑みの意味を悟った。

「今日、天気いいから白がお菓子食べてる間、お花外に出してきてあげるよ」

白に告げると、白の笑顔は寂しいものから、自然なものへと変わる。

「いつもありがとう。でも、あずみん、学校は？」

「今日、日曜だよ」

そう言いながら「煙製ベーコンやきそば味」の袋を派手に破る。学校の同級生から習った横からの開け方だった。途端にソースと煙が混ざった、絶妙な臭いが鼻に届く。白と目を合わせてにやりと笑みを交わす、この瞬間が好きだった。

自分が一枚スナックを手にとると、白も一枚とった。味見をすませると、ソファの端にぴよんと飛び乗って、足をぶらぶらさせながらスナックを食べ続けた。

「でも来週は修学旅行だから、次これるの一週間後くらいになるかも。だから今日はお花、たくさんおひさまに当てていてあげようと思って早くきたんだ。白もまだ起きてるかもと思つて。寝てたけど」

「旅行、どこに行くの？」

白が興味深げに聞く。

「京都！」思わず声が高くなった。「でも私、どこも行つたことないから、どこでもうれしんだけど」

「京都はいいよ。国内で一番きれいな街じゃないかな。ぼくらの組織のルートだし、きつと勉強にもなると思うよ」

その白の説明には、ちょっと苦笑いで答えるしかなかった。

「私、どつちかっていうとかわいいグッズとおみやげにしか興味ないけど。きたみんは歴史好きだから、色々お寺回りたいって言つてた」

「きたみん？」

思わず喜多見の名前を出してしまったことに気が付いて、青ざめながら口に手を当てた。そして、それが一番やつてはいけない反応だったことに直後、気が付いた。

「あ——」

「もしかしてサダクラ製菓で会った人かな。髪の毛の長い、弓使いの人」

「あ、いや——その——」

「あ、そうだ」白が笑う。「ぼくの肩を撃つた人だ。不慣れそうだったけど、すごい集中力だっ

たな」

手の中のスナックと視線を両方下げて、小さな声で白に言うしかなかった。

「と——友達なんだ。敵なのは分かっているけど……どうしよう、私——」

でも、白はスナックを味わいながらソファにもたれかけて、まるで気にしていないように向こうを向いていた。

「だいじょうぶだよ。ぼくには関係ないし」

軽く頭を傾けながら、視線だけをこつちに送って、白が付け足した。

「強くて優しそうな人だったね」

腰から下げた折りたたみ傘に付けているためぎのマスクットを見ていると、喜多見の優しい顔が浮かんできて、胸が締め付けられるようだった。夏休みに入ってから、何回か喜多見がアパートに様子を見に来てくれていた。

「みんな好きなのに、なんで敵同士じゃなきゃいけないんだろ」

そうぼつりと漏らすと、白はちよつとの間黙つてから、急にソファの背もたれをつかんで、ひよいと体を返すようにして横に腰掛けてきた。

「残念だけど、人間の歴史はいつもこんな感じだから。きつとそういう生き物なんだろうね、ぼくらは」 同じように足をぶらぶらさせながら白はそう言つてから、じつとこつちを見た。

「でもあずみんは違うと思うよ」

いつもここに来ると、白が笑顔にしてくれた。こんな狭くて暗いところはずつといるのに、なんでそんなに明るい気持ちでいられるのかが不思議で仕方がなかった。本も勉強も好きではなかったが、白がいつも読んでいるあの分厚い本の山からその明るさが来ているなら、自分もつと本を読んでみたいなと思うまでになつていった。もつとも、図書室から借りた白のおすすめ小説は、二ページで挫折していた。

「白は物知りだし、きつと京都一緒に行つたらいっぱい案内してくれるよね」

そう言つてから、すぐにもずいことを言つたのに気が付いたが、もう遅かった。

「ぼくは昼間は外に出られないから。たぶん、一生行くことはないと思うよ」

「ごめんね」と急いで謝つたが、白は気にする様子もなく、笑顔だった。

「ううん。あとで話を聞かせてよ」

この笑顔が本当に好きだった。暗い地下の部屋が、白が笑う度に、どんな日の当たたる部屋よりも明るく感じられた。それで気を取り直して、ソファの端からぴよんと飛び降りた。

「おみやげ、何がいい？」

白に聞くと、白はスナックの袋を指差して言う。

「京都限定の味つてあつたよね」

「うん！ それ買ってくるよ」

思いつきりの笑顔でそう応えると、白がちよつと悪戯っぽい表情で聞いた。

「大きな箱だったよ。あずみんの半分くらいありそうだった」

「平気。阿坂に持ってもらおうし」

それだけ告げると、近くの鉢植えを二つつかんで、両脇に抱えるように持ち上げた。

「じゃあ、お花出してくるね」

黄色い花弁の香りが素敵だった。いつも白も同じような臭いがしていた。

あの時、五倉山で見た恐ろしい光景が頭から消えたわけではなかった。時々、何かの拍子に白の横顔が、あの雷鳴轟く景色の中で見た白い影と重なって、一瞬体中が強張る時もあったが、それでも、本が大好きで、花が大好きで、お菓子が大好きなこの少年が、アズミは大好きだった。花を持って、足で部屋のドアを開けると、まだソファの背もたれに座ったまま、白はいつもの笑顔で送り出してくれた。

「いつてらっしやい」